

竟陵派の詩經學

——鍾惺の評價をめぐって——

村山 吉 廣

明代の説詩

明代の説詩には四派があるとされる。その一は元代の習を襲い朱傳を墨守したものである。その典型として挙げられるのは胡廣らが勅を奉じて撰した『詩經大全』であろう。いうまでもなくこの書は明の永樂年間に作られた「五經大全」の一つである。「四庫全書」の「提要」はこの書について次のように記述している。

其與纂修者、自胡廣以下、如楊榮金幼孜等凡四十二人、悉一時知名之士。然其書實本元安成劉瑾所著詩傳通釋而稍損益之。今劉氏之本尚存。取以參校大約取其冗蔓者、略刪數條。又劉本以小序隸各篇之下。是書別爲一編、小變其例而大指則全相蹈襲（下略）。

竟陵派の詩經學（村山）

この書が元の劉瑾の『詩傳通釋』に依據しわずかに小序を詩篇とは別に一本としたことだけが異るとされているのはここに言われる通りである。『總目提要』ではこれをきびしく批判し「乃剽竊舊文、以應詔。此書名爲官撰、實本元安城劉瑾所著詩傳通釋、而損益之」と論じている。しかしこの書は學宮に頒布され「舉子の業を習ふ者、必ず此を以つて準則となす」（「提要」の語）ものとなったので影響するところは大きい。

その二は朱傳にかたよらず、漢宋を兼采し名物を博考する立場をとる一群である。例えば季本の『詩說解頤』がその一つとして挙げられよう。この本については『總目提要』の記述はきわめて好意的である。次にそれを記しておく。

是書凡總論二卷、正釋三十卷、字義八卷。大抵多出新

意、不肯剽襲前人、而徵引該洽、亦頗足以自申其說。凡書中改定舊說者、必反覆援據、明著其所以然。如以南山篇之必告父母句、爲魯桓告父母之廟、九罋篇之公歸不復句、謂以鴻北向則不復爲興……（中略）……如斯之類、皆足於舊說之外、備說詩之一解。雖間傷穿鑿而語率有徵。尙非王學末流、以狂禪解經者比也。

季本は『詩說解頤』の執筆動機について「首篇」で張橫渠の言を引き次のように述べている。

張子曰置心平易、然後可以言詩。涵詠從容則忽不自知其解頤矣。此說詩者以意逆志之宗旨而詩傳之所以可續也（下略）

詩序について「案謂學詩而不求序、猶入室而不由戶也」という評價を與えつつも、朱子についても「爲辨說一洗序說之陋、而又爲集傳以詳解之。可謂有功於詩學矣」として、その意義を認めている。しかしさらに「特其所見、猶泥舊聞而詩之大意不能超然悉會於言表則反有以起人復尋毛舊」と述べてその限界を指摘している。その主張は「首編」の末尾で「蓋於舊說多所破之而一以經文爲主」と宣言しているところに盡きる。

季本のこのような立場に對しては朱竹垞の『經義考』も

「徐渭曰會稽季先生所著詩說解頤、其志正、其意遠。悉本於經而不泥於舊聞、深有得於孔氏之遺旨、有裨後學」と高い評價を與えている。季本字は明德、號は彭山。王陽明に師事している。しかし學問は實證を離れることがなかったので『總目提要』の記述もそのおわりにおいて次のように言う。

尙非王學末流、以狂禪解經者比也（前出）。存此一編、使知姚江立教之初、其高足弟子、研求經傳、考究訓詁、乃如此。亦何嘗執六經註我之說、不立語言文字哉。

『詩說解頤』と同様の立場にある同時代の著作には郝敬の『毛詩原解』、李芳先の『讀詩私記』、朱謀瑋の『詩故』、『姚舜牧の『詩經疑問』などがある。これらの諸書は時として毛傳朱傳を兼用し、又時として毛鄭を主として朱子を批判するが、そうした場合、折衷や批判の出所として援用するのが、多くの場合、呂氏の『家塾讀詩記』、蘇轍の『詩集傳』、嚴粲の『詩輯』であることは共通である。

その三は大膽に自説を主張し獨特の見解を世に問うたもので、顯著なものには何楷の『詩經世本古義』がある。この書は強いて『詩經』の詩の時世を定め、それぞれの詩を夏の少康より周の敬王まで、三代二十八王の時代にふり分けて説明している。従って從來の『詩經』の詩の排列は全く無視され

て、どの詩も新たに世次別に分類されている。しかもこれに關連して「詩序」もみづから作製している。自序には次のように言う。

書成悉依時代爲次、名曰世本古義。仲子與氏誦詩論世之指也。卷凡二十八。與經宿配。每篇做古序體、更定小引、以冠其前。其諸論義未安者、則附見之章句之後、欲觀者了其顛末、有所攷鏡焉。

編次改變と詩序作製の二事については論難が多い。『總目提要』は「楷乃於三千年後、鉤棘字句、牽合史傳、以定其姓名時代。如月出篇有舒窈窕兮、舒慍受兮之文、卽指以爲夏徵舒。此猶有一字之近也。碩鼠一詩、茫無指實、而指以爲左傳之魏壽餘、此孰見之而孰傳之、以大田爲幽雅、豐年良相爲幽頌、卽屬於公劉之世、此猶有先儒之舊說。以草虫爲南陔、以菁菁者莪、爲由儀、以緝蠻爲崇丘、又孰傳之。而孰受之。大惑不解、楷之謂乎」としてその強引さを批判している。

ただし何楷の學問が博洽で、援用が豊富であつたのはその後の諸家のひとしく認めるところであり、清初の姚際恆もその著『詩經通論』の卷前「詩經論旨」で次のように評している。

何氏書、刻于崇禎末年。刻成、旋遭變亂。(中略)大抵此

竟陵派の詩經學(村山)

書詩學固所必黜、而亦時可備觀、以其能廣收博覽。凡涉古今詩說及他說之有關於詩者、靡不兼收並錄。復以經傳子詩所引詩辭之不同者、句櫛字比、一一詳註于下。如此之類、故云可備觀爾。有志詩學者于此書不可惑之、又不可棄之也。然將來此書日就漸減、世不可見。重刻亦須千金、恐無此好事者矣。

『四庫提要』の筆者の意見もほぼ同様であり「楷學問博通、引援賅洽。凡名物訓詁、一一攷證詳明。典據精確、實非宋以來諸儒所可及」と記している。

何楷は『明史』卷二百七十六の傳によれば字は元子、漳州鎮海衛の人で天啓五年の進士。工科都給事中となつた。硬骨の士ではじめ魏忠賢と對立し、のち福王に仕えてはしきりに上疏して意見を言い、唐王に従つてからは鄭芝龍、鴻達兄弟と争い、怒を買つて謀によつて賊に襲われ一耳を切り取られたとある。前引の姚際恆も「玄子官閩朝、爲鄭氏所害、印行無多、板亦燬矣」と傳えている。⁽²⁾『明史』では末尾に「楷博綜群書、寒暑勿輟、尤邃於經學」の一條をのせている。いずれにしても、新見を創出するに熱心であつたばかりでなく、博引傍證して考據にも十全を期したところに他と異なる特質があつたと言えよう。

獨自の見解を示そうとした點では『子貢詩傳』と『申培詩說』の二書もこの類に入るであろう。兩書とも豊坊の僞撰とされている。それについてのものとも端的な指摘は姚際恆の『古今僞書考』の次の一文であらう。

二書、明豊坊僞撰（中略）。子貢詩傳、徒以孔子有可與言詩一語、遂附會爲此。其誕妄固不必言。若申培者、漢志有魯故・魯說。隋志云、魯詩亡于西晉。則亡佚久矣。坊之作此、名爲二書、實則相輔而行、彼此互證、若合一轍。中多暗襲朱氏集傳、以與詩序異者。又襲詩序爲朱之所不辨者。其他自創雖不無一二合理、然妄託古人以欺世、其罪大矣。

いうまでもなく二書のうちの前者は子貢が孔子の詩說を記述したもの、後者は漢の文帝の時の博士申培の亡佚した詩說の出現したものという形で世に出たものである。書體も篆隸を用いて古めかしく装っていた。このため大いに世人の關心を呼びおこし各地で紛々として傳刻が行われた。『總目提要』は『詩傳』（子貢詩傳）の項で、『詩傳』『詩說』の二書が郭子章・李維楨らによって「傳刻釋文」されたことや何鏜の「漢魏叢書」、毛晉の「津逮秘書」に收められたことを謬妄であると述べている。

しかしこの二書についても夏偉才氏の『詩經研究史概要』

（一九八二年・中州書畫社出版）の「僞詩傳及其影響」の條では次のような積極的な評價が下されている。

明代後期僞書成風、象僞詩傳這樣的僞託、當代學者崇信將近百年、不能辨識、正反映明人學問空虛淺薄、豊坊玩世不恭、僞託欺世、對於明人的空疏不學、是強烈的諷刺和否定。（中略）僞詩傳產生在明代後期宋學定爲官方統治思想的時候、朱熹詩集傳及其疏釋幾乎盤踞了整個詩經傳習和研究領域。這兩本書、托名古人、突破漢宋以來傳統詩說、表現出對詩經重新研究的要求、他對有些詩篇的具體見解、在明人的詩經研究史上不失爲一家之言。

僞託・僞書とはいいながら、豊坊の著述には固定化し權威化した漢宋の詩經學への果敢な挑戦があることをよとしたものである。『明史』の傳（列傳第七十九豊熙の附傳）によれば豊坊は「博學工文、兼通書法」ではあったが「性狂誕」とされる。別に『十三經訓詁』なるものも残されたが「類多贅語」という。明末人特有の奔放さを持つ自由人であり、從來の解釋を離れた着想や發想に向って一路つき進んだ趣きがある。

その四は古音研究の一派であり、陳第の『毛詩古音考』がそれを代表していると考えられる。陳第は連江の人で字は季立、號は一齋、萬曆の諸生であった。官は遊擊將軍というが

詩に巧みで藏書も多かった。『經義考』は焦竑序と陳第の自序を載せている。清代に入って顧炎武が『詩本音』を著わしているが、清代の古韻研究の基をなしたものととして重んじられている。⁽⁴⁾

以上四派の著述は『明史』藝文志の詩類に著録されている。その總數は八十七部九百八卷である。しかしこれらのなかには鍾惺らのいわゆる「竟陵派」の『詩經』に關する著述は含まれていない。

『四庫全書總目提要』に至るとようやく「存目」の部に『詩經圖史合考』『毛詩解』の二書があるが、その評價は低い。のちに本論文の中心として取上げる『詩經鍾評』は存目にも記されていない。存目にはほかに章調鼎『詩經備考』、錢天錫『詩牖』、萬時華『詩經偶箋』、賀貽孫『詩觸』、戴君恩『讀風臆評』など竟陵派の流れを汲む人々の詩解が列擧されているが、扱いは冷淡である。

これはこの派に對する清代の學界の批判がきびしかったことに起因している。そこでこの派の説詩を明代詩經學のなかにどう位置づけるかという問題に入る前に、次章においては清代以來のこの派に對する評價が妥當なものであったかどうかというテーマについて觸れておくことにする。

竟陵派批判

竟陵はいまの湖北省天門縣皂市鎮の地名である。南齊時代に武帝の第二子竟陵王をめぐる八人の文士——謝朓・任昉・沈約・陸倕・范雲・蕭琛・王融・蕭衍——を總稱して「竟陵八友」とよんだことは史上に名高い。『茶經』で知られる唐の陸羽もこの地の出身で竟陵子と號した。明末にこの地から鍾惺・譚元春の二人が出て、當時盛行の公安派に對して獨特の詩論を唱え、旺盛な文學活動を行ったので竟陵派の名を得た。兩人の傳は『明史』二百八十八・文苑四の公安派の袁宏道・中道兄弟の附傳として存在する。いま、それを左に掲げる。

惺字伯敬、竟陵人。萬曆三十八年進士。授行人、稍遷工部主事。尋改南京禮部、進郎中。擢福建提學僉事、以父憂歸、卒於家。惺貌寢、羸不勝衣。爲人嚴冷、不喜接俗客。由此得謝人事。官南都、傲秦淮水閣讀史、恆至丙夜。有所見卽筆之、名曰史懷。晚逃於禪以卒。

自宏道矯王李之弊、倡以清真、惺復矯其弊、變而爲幽深孤峭。與同里譚元春評選唐人之詩、爲唐詩歸、又評選隋以前詩爲古詩歸。鍾譚之名滿天下、謂之竟陵體。然兩人學不

甚富、其識解多僻、大爲通人所譏。

元春字友夏、名輩後於惺、以詩歸故、與齊名。至天啓七年始舉鄉試第一。惺已前卒矣。

鍾惺は號を退谷と言った。明の萬曆二年（一五七四）に生まれ、天啓五年（一六二五）に歿している。享年五十二であった。譚元春がはじめて郷試に擧げられたのはそれから二年後の天啓七年である。傳に「惺已前卒矣」とあるのはそのことである。進士になったのは萬曆三十八年、三十七歳の時であった。最終の官歴となった福建提學僉事となったのは四十八歳の天啓元年のことであった。二十歳のころから多病であったためか佛典に親しんでいたが、晩年にはことに楞嚴經に精しく、その注を作っている。『楞嚴經如說』十卷がそれである。死に先立って五戒を受けた。法名を斷殘という。

生涯の盟友となった譚元春は萬曆十四年生まれで鍾惺より十二歳年下である。交りが生じたのは萬曆三十二年、鍾惺三十一歳、譚元春十八歳のことである。兩人の文壇における聲價を定めることとなった『詩歸』の刊行は四十五年、鍾惺四十四歳の時であった。この年には『史懷』も書かれている。譚元春も短命であり、崇禎四年（一六三一）に世を去っている。四十五歳であった。鍾惺の傳は譚元春によってつづら

れた「退谷先生墓誌銘」にもっとも詳しく記されている。それは譚元春の著作を収めた『譚友夏合集』卷十二にある。

蘇州の詩人徐波は萬曆四十七年にその作品を鍾惺に激賞されたことから竟陵派の系列の人となり、天啓の末年に『鍾伯敬先生遺稿』を刊行している。これとはまた別に沈春澤による『隱秀軒集』の刊行や陸雲龍による『鍾伯敬先生合集』の出版もなされている。

竟陵派の抬頭は公安派をしりぞけてこれに代ったことに依る。『明史』文苑四には袁中道の條の末に次のようにある。

至宏道、益矯以清新輕俊。學者多舍王李而從之、目爲公安體。然戲謔嘲笑、間雜俚語、空疎者便之。其後、王李風漸息、而鍾譚之說大熾。

簡単に言えば李王ら古文辭學派の形式主義を捨てて「性靈」の發露を主張したのが公安派であるが、それが恣意的となり「戲謔」と「俚語」とに走って空疎のそしりを受けた。

この弊を指摘して「眞詩」を主張し「幽深孤峭」の詩境を鼓吹したのが竟陵派であった。⁽⁵⁾しかしこの竟陵派の抬頭に對しては同時代の作家たちには『明史』の伝えるごとく「兩人學不甚富、其識解多僻、大爲通人所譏」という見方を持している者もあった。時あたかも明清の交替期であったが、こうし

た批判が一段ときびしさを増すのは清代に入ってからである。

批判者としてまず第一に挙げられるのは錢謙益である。彼はその『列朝詩集小傳』の「鍾提學惺」の條で次のように述べている。

伯敬少負才藻、有聲公車間。擢第之後、思別出手眼、別立深幽孤峭之宗、以驅駕古人之上。而同里譚生元春、爲之應和、海內稱詩者靡然從之。謂之鍾譚體。（中略）數年之後、所撰『古今詩歸』、盛行於世、承學之士、家置一編、奉之如尼丘之刪定。而寡陋無稽、錯繆疊出、稍知古學者咸能挾策以攻其短。詩歸出而鍾譚之底蘊畢露、溝澮之盈於是乎涸然無餘地矣。當其創獲之初、亦嘗覃思苦心、尋味古人之微言奧旨、少有一知半見、掠影希光、以求絕出於時俗。久之、見日益僻、膽日益粗。舉古人之高文大篇、鋪陳排比者、以爲繁蕪熟爛、胥欲掃而刊之、而惟其僻見之師。其所謂深幽孤峭者、木客之清吟、如幽獨君之冥語。如夢而入鼠穴、如幻而之鬼國。浸淫三十餘年、風移俗易、滔滔不返。

（中略）鍾譚之類、豈亦五行志所謂詩妖者乎。

前半は鍾惺・譚元春による『詩歸』が世に盛行して「家置一編、奉之如尼丘之刪定」という有様であったことを言い、

竟陵派の詩經學（村山）

後半は兩人の淺學であることと論斷が僻見に満ちていることを述べ、これを「詩妖」と名付けている。

錢謙益に劣らずはげしい論難を加えているのは顧炎武である。彼はその著『日知錄』卷十八にとくに「鍾惺」の條を設けて次のように論じている。

鍾惺字伯敬、景陵人。萬曆庚戌進士。天啓初任福建提學副使、大通關節、丁父憂去職、尙挾姬妾、游武夷山而後卽路。巡撫南居益疏劾。有云百度踰閑、五經掃地、化子衿爲錢樹、桃李堪羞、登阻僧於皐比、門牆成市。公然棄名教而不顧。甚至承親諱而治游、疑爲病狂喪心。詎止文行無行。

坐是沈廢于家、乃選歷代之詩、名曰詩歸、其書盛行於世。已而評左傳、評史記、評毛詩、好行小慧、自立新說。天下之士、靡然從之。而論者遂忘其不孝貪汚之罪、且列之文人矣。余聞閩人言、學臣之囂諸生、自伯敬始。當時之學臣、其于伯敬、固當如茶肆之陸鴻漸奉爲利市之神、何怪讀其所選之詩、以爲風騷再作者耶。其罪雖不及李贄、然亦敗壞天下之一人。（下略）

顧炎武の論點は二つあり、一つは私行上の問題であり、いま一つは「好行小慧、自立新說」のことである。彼はこの條の前に「李贄」の一條を置いて李贄糾弾を行っているが、そ

の場合も李贄が「挾妓女白晝同浴、勾引士人妻女、入庵講法、至有攜衾枕而宿者、一境如狂」と述べている。いまその真相をたしかめることはできないが、或は兩者にはともに明末の風氣ともいふべき放縱な倫理觀があつたのであろう。また鍾惺の場合には「大通關節」とか「學臣之嚮諸生」とかいふ官吏としての不正があつたとしてゐるがこれも事實關係はともかくとしてそのような見方のなされる背景があつたのかも知れない。

ただそれらのことと鍾惺の學術上の立場や主張の是非とはおのづから別のもつと考へなければならぬのに、顧炎武の述べているところはあまりにも感情が激越であつて、公平な判斷を見失つてゐる恐れを抱かせるものがある。

さきに舉げた錢謙益の加へたはげしい批判にも鍾惺に對する無用な「人身攻撃」のおもむきがある。このことはすでに張國光氏の「論竟陵派詩歌理論的進歩意義兼評錢謙益の誤說」(『竟陵派與晚明文學革新思潮』(竟陵派文學研究會編・武漢大學出版社・一九八七年五月刊))に論及がある。この一節を次に舉げておきたい。

錢氏爲了要雄長清初詩壇、當然要反對前・後七子的詩必漢魏盛唐的復古主義。但如果僅反對前・後七子、那就談不

上有什么建樹。因爲公安派與竟陵派早已完成了反對前後七子的歷史使命，爲此錢氏對這兩派就也要痛下針砭，乃至肆意貶斥。如果說由于錢氏同公安三袁私交頗深，因而有時不得不不在表面上對他們有所褒揚的話，那麼他更要把代公安派而起并且事實上已主宰詩壇三十年的竟陵派，當作自己稱霸詩壇的最大障礙，因而就放肆地加以攻擊了(中略)斥之爲鬼趣，誣之爲詩妖，錢氏對竟陵派的敵視竟到了此極端的程度！這哪里是文學批評？實際是對竟陵派的人身攻擊。

(下略)。

張氏の言わんとするところは錢謙益の鍾惺らに對する批判は彼の詩壇の霸者たらんとする思惑によつてことさらに増幅され極論と化してゐるというにある。

『明史』の傳、錢謙益、顧炎武らがこぞつて「學不甚富」「寡陋無稽」「好行小慧」と批難してゐる「不學」という定評についても一考を要する。

これについては近人郭紹虞氏がその著『中國文學批評史』(商務印書館刊)で鍾惺のために辯護の筆を執つてゐる。次にそれを引用する。

人家說、鍾譚不學而他們則正欲以學其弊。鍾氏與譚友夏書云「輕詆今人詩、不若細看古人詩、細看古人詩、便不暇

詆今人也（『隱秀軒文』往集・書牘一）。他們何曾號呼叫罵、心粗膽橫。如牧齋之所言。鍾氏孫曇生詩序云「人之爲詩、所入不同、而其所成亦異。從名人、才入、興入者、心躁而氣浮……從學入者心平而氣實」（『隱秀軒文』吳集序・又二）。蓋從名人、才入、興入者、則欲其心之由躁而平、氣之由浮而實、必待年而定。年愈高而學愈進、則詩之所成也隨以異。從學入者便不須如此。可知鍾氏論詩、正以從學入者爲高。是則竟陵派之詩論、又何嘗廢學（下卷第三篇明代、第三節竟陵派）

このように見てくると、清代における鍾惺一派に對する批判には必ずしも當を得ていないものがあるようである。従つてその明代詩經學上における位置づけもこのような批判を安易に受け入れることなく、新たな觀點からなされるべきである（6）と考えられる。

訓詁と評經

鍾惺が『詩歸』の體にならつて『左傳』『毛詩』『史記』に圈批と評隲とを加えたことは、さきに擧げた顧炎武の『日知錄』の指摘しているところである。このうち『左傳』については、現在私の寓目しているものには内閣文庫所藏の『左傳

合註詳解』一冊本（二卷）がある。鍾惺の點評で、古吳杜麟徵振公・王道焜昭平訂正。崇禎十二年序刊、近聖居藏版である。

『詩經』についての著述については鍾惺自身その「詩論」の一文の中で次のように記している（7）。

予家世受詩、暇日取三百篇正文流覽之。意有所得、間拈數語。大抵依考亭所注。稍爲之導其滯、醒其癡、補其疎、省其累、與其膚、徑其迂。業已刻之吳興。

これが『日知錄』の記述と照應する資料であるが、これに該當するかと思われる書に二種あり、一つは『鍾伯敬先生評點詩經』である。この書には序がない。二冊本で來因堂藏版。いま一つは『詩經鍾評』と題するもので三冊本。明の泰昌元年序刊、有杞堂藏版である。この二書とも内閣文庫所藏本によつて現物を確認している（8）。

なおさきに『四庫全書總目提要』の存目に『詩經圖史合考』『毛詩解』の二書の書名があることを記したが、『提要』の文章によつて、この二書が「詩論」に言うところの書物と符合しないことは明らかである。又『毛詩解』は内閣文庫に所藏本あり、その内容が知られる。

いま『續修四庫全書提要』を見ると鍾惺のものとして『詩

經評』不分卷・明閔氏刊朱墨印本なるものが採られている。その一文を次にかかげる。

明鍾惺評點。是書廢棄一切傳箋註、止就三百篇正文、略拈數語、或着行間、或列欄上、或括題下。語簡而彌雋永。大抵本其所撰詩歸之旨。亦說詩者別一法門也（下略）。

形式と内容の共通性から判斷すると、ここに言う『詩經評』は内閣文庫所藏の二書のうちでは『詩經鍾評』により近い（但し『詩經鍾評』は朱墨印本ではない）。いずれにしても鍾惺が『詩歸』の體にならい、經典である『詩經』にも圈評を施した書物を世に送って後世の紛議のもとを作っていることはたしかである。前引の『日知錄』鍾惺の條の原注では、顧炎武は次のように鍾惺を糾弾している。

錢氏謂古人之于經傳、敬之如神明、導之如師保。誰敢僭而加之評隲。評隲之多、自近代始。而莫甚于越之孫氏、楚之鍾氏（下略）。

「越之孫氏」とは言うまでもなく孫鑑すなわち孫月峯のことであり、『孫月峯評經』の著で名高い。

なお『日知錄』の言う「評隲」とは本文に短文の評語を下すことであるが、廣義にはそうしたとともに本文に圈點・批點を施すことをも意味する。ただしこの圈評の法は決して

孫鑑や鍾惺の創始したものではない。近人尤信雄氏も『桐城文派學述』（文津出版社 民國六十四年四月刊）第四章第二節「評點之學」の項でそれについて詳しい紹介をしている。尤氏はまず曾滌生「經史百家簡編序」の次の一文をかかげている。

前明以四書經藝取士。我朝因之。科場有勾股點句之例。蓋猶古者章句之遺意。試官評定甲乙、用硃墨旌別其旁、名曰圈點。後人不察、輒仿其法、以塗抹古書、大圈密點、狼籍行間。故章句者古人治經之盛業也。而今專以施之時文。

圈點者科場之陋習也。而今反以施之古書、末流之變遷、何可勝道。

朱墨の圈點を用いた例は唐の劉蛻の『文泉子集』卷三「文章銘」に始まり、宋の呂祖謙の『古文關鍵』なども唐宋文六十餘篇に圈點を施しているし、謝枋得の『文章軌範』に批注圈點のあることは世間周知のことである。ただ明代に入ると、會試などの採點者である主司が答案である文卷のなかで佳良なものに出會うごとに圈評を施す風が一般的となった。これが出版界にも及び、民間の書肆が四書を刻したりする場合にも好んでこれに圈評がつけられるようになった。曾滌生が「科場之陋習」と記しているのはそのためである。

しかし書肆が四書に圈評を施した例を除いては、孫鑑や鍾

惺の活躍した明末までの間に『左傳』や『詩經』のような五經の經典にあえて圈評を加える學徒はきわめて稀であった。そこで彼らの述作は「古人之于經傳、敬之如神明、尊之如師保、誰敢僭而加之評隲」という立場を堅持する顧炎武の強い反感を招いたのである。

では鍾惺はいかなる詩經觀を持っていたのであろうか。これはその「詩論」を検討することによって推知できる。「詩論」は冒頭に次のように言う。

詩、活物也。游夏以後、自漢至宋、無不說詩者。不必皆有當於詩。而皆可以說詩。其皆可以說詩者、卽在不必皆有當於詩之中。非說詩者之能如此、而詩之爲物、不能不如是也。

詩の注釋は時代より人によってまちまちである。歴史的に見てどれも必ずしも當を得てはいない。しかしそれは說詩者の罪ではなくて詩というものの本來持っている「活物」としての特性のしからしむるところだといふのである。このことを更に次のように言う。

說詩者盈天下、達於後世。屢遷數變。而詩不知、而詩固已明矣、而詩固已行矣。然而詩之爲詩自如也。此詩之所以經也。

竟陵派の詩經學（村山）

說詩者が時代とともにどのように變化した注解を行つてやうとも、それは說詩者の都合によるものであり、詩そのものは何ら影響を受けることはない。「詩之爲詩自知也」というのはその意味である。こうした特質を持っているからこそ詩は「經」たりうるのだということになる。

それでは說詩者の注解の意義はいかなるところにあるとするのであるか。「詩論」は次のように記す。

古之制禮者、從極不肖立想、而賢者聽之。解經者、從極愚立想、而明者聽之。今以其立想之處、遂認爲究極之地可乎。

つまりいかなる注解も本來究極のものではない。それは讀む人のために手がかりを與え、理解の起點となれば十分なのだといふ考え方であり、むしろ讀む人の側に自由な受容を期待したものである。

また同一人の注解であっても、同一の詩からつねに同一の感情を引き出されるとは限らない。情趣は刻々に變化するものだからである。これを「趣以境生、情由日徙」とも言っている。従つて詩には固定の訓詁があつてはならないことになる。それを次のように記す。

欲使宋之不異於漢、漢之不異於游夏、游夏之說詩、不異

於作詩者、不幾於刻舟而守株乎。

注解が古今一つに定まるべきだというのは「刻舟守株」に類する謬見だとされる。そこで彼は次のような結論を下す。

故說詩者散爲萬、而詩之體自一、執其一而詩之用且萬、噫此詩之所以爲經也。

なおここで鍾惺の問題としている「詩」は主として『詩經』の詩であるが、その意識のなかでは『詩經』の詩と古詩や唐宋詩との區別はなかった。古詩・唐詩を選んだ『詩歸』の「序」でも次のように述べている。

選古人詩而命曰詩歸、非謂古人之詩以吾所選爲歸。庶幾見吾所選者以古人爲歸也。引古人之精神以接後人之心目、使其心目有所止焉、如是而已矣。

「非謂古人之詩以吾所選爲歸」とあるように、ここでも自分の見解を固定化し權威化することに反對している。

すなわち鍾惺は『詩經』の詩をはじめ歷代の詩を説くに當つては、あくまでもその詩に託された古人乃至は作者の心の在り所——これを眞詩とよぶ——を求めた。しかしこの眞詩の把握は必ず時代により人によって限界があると考えている⁽¹¹⁾。これは詩のもつ本質から生ずるもので、いわば受容者にとつての宿命である。したがって注解はいわばその人がぎり

のものであつてよい。作詩者の心を知るよすがとなり、後人への橋わたしの役割を演ずれば足りるという考え方である。

そこで彼は歷代の訓詁注釋のどれにも絶對的な權威を認めない。それはすべて限界と制約とを伴うものだからである⁽¹²⁾。

いまその『詩經鍾評』を見ると、鍾惺は詩の本文(正文)に自在に批點をつけ圈點を施した。句中或は欄上には任意に「評語」という名の感想乃至は批評を書き記した。こうした奔放さは時として「淺陋」「不學」のそしりを受けたが、これはもとより彼の念慮するところではなかった。

彼は傳注の權威を認めず、歷代の訓詁を排し、直感・直覺による論斷を重んじた。彼の尊重したものはみずからの「感性」である。彼はこのおのれ一人の感性によってひき出されたものを圈評という形で讀者に提供した。彼はこの批評の方式を導入して讀者のために「欣賞」の介助者となることに全き使命觀を見出していた人であつたと言える⁽¹³⁾。

これは明代の説詩の流れのなかでは第三の「大膽に自説を主張し獨特の見解を世に問うた」流派に屬するが、そのなかでもきわだつて異なる「評經」という新しい立場である。この竟陵派の詩説はやがて同時代の章調鼎・錢天錫・萬時華・賀貽孫⁽¹⁴⁾・戴君恩⁽¹⁵⁾の著述によって展開されてゆくが、清代に至り

姚際恆・崔述・方玉潤らの理解者も現われることとなる。⁽¹⁶⁾これらについては稿を改めて詳述する。いずれにしても鍾惺の詩經學は近代における『詩經』の「欣賞」を促進し、「文學鑑賞派」ともいえるべき流れの成立に寄與した意義が大きいとみなさなければならない。

注

- (1) 郝敬については『毛詩原解』序説（村山吉廣「詩經研究」12號 一九八七年二月刊）参照。
- (2) 何楷『詩經世本古義』二十八卷は現在「景印四庫全書珍本四集」所収のものを利用することができる。
- (3) 『子貢詩傳』については『子貢詩傳』始末（坂田新「早稻田大學大学院文學研究科紀要別冊」4號 一九七八年三月刊）がある。
- 申培の『詩説』については「申培詩説」（吳春山「孔孟考月報」11—3 一九七二年十一月刊）、「申培詩説辨偽」（杜松伯「孔孟學報」45期 一九八三年四月刊）、「考辨『詩傳』和『詩説』」（林慶彰『清初的群經辨偽學』第五章へ臺北文津出版社 一九九〇年三月刊）等を参照。
- (4) 陳第の業績の評價については「顧炎武の『詩本音』について」（一）（賴惟勤「お茶の水女子大學人文科學紀要」21—3 一九六八年三月刊）に言及がある。他に「陳第及其『毛詩古竟陵派の詩經學（村山）
- (5) 『詩歸』については「詩歸について」（入矢義高「東方學報」京都 第十六冊 一九四八年十月刊）がある。公安派と竟陵派との關係については「公安から竟陵へ——袁小修を中心として——」（入矢義高「東方學報」京都 第二十五冊 一九五四年十月刊）、「竟陵派の文學理論——公安派との差異點に重點をおいて——」（高仁徳「藝文研究」56號 一九八九年一月刊）など参照。
- (6) 中國においても一九八〇年代になってようやく竟陵派再評價のきざしが現われた。それはこの派の「改革」と「創新」の精神に價値を見出したからである。鍾惺・譚元春の生地である湖北省には一九八四年八月に「竟陵派文學研究會」が結成された。間もなく第一回學術討論會も開かれている。その成果は同年十二月に主編張國光、副主編張業茂によって『竟陵派與晚明文學革新思潮』（武漢大學出版社刊）として刊行された。「應公正地評價竟陵派對文學史的貢獻」（焦知雲）以下、三十數篇の論文が收められている。
- (7) 『隱秀軒集』卷第二十三（李先耕・崔重慶標校 上海古籍出版社 一九九二年九月刊）所收。なお加藤實氏に「詩論」譯注（『詩經研究』第六號 一九八一年六月刊）がある。
- (8) 内閣文庫所藏『詩經鍾評』については村山吉廣「鍾伯敬『詩

經鍾評』の周邊」(『詩經研究』(同上)がある。

- (9) 桐城派の圈點については武内義雄博士に「桐城派の圈識法」(『支那學』八・大正十年六月)がある。

- (10) 清代中期に入り桐城派盛行の時代を迎えると經傳に對する評點もかなり自由に行われるようになり姚姬傳の『評點左傳』『評點禮記』『評點易經』なども刊行されている。また清末では吳汝綸に『評點詩經』『評點書經』がある。

- (11) 「眞詩」の解釋について入谷義高氏は次のように述べておられる。

詩文における古今不動の規格というものの存在を、(袁)宏道は否定するのである。彼の信奉する唯一のものは、自己の胸臆にある「性靈」であった。鍾氏はそれを「精神」という言葉に置きかえる。(中略)「眞詩」という觀念も、實は袁宏道から脱胎し、それを鍾氏流に表現したものである(前掲「詩歸について」)。

- (12) 文學史上では時代の先後によって評價の基準を立てるのは李王らのいわゆる古文辭學派の立場であり、公安派も竟陵派もこれを排撃している。ここではこの考え方が『詩經』解釋にも適用されているものと思われる。

- (13) 『詩歸』の序で鍾惺の盟友譚元春も次のようにその立場を明らかにしている。

法は前より定めず、筆の至る所を法となす。趣は強ひて括

ばず、詣の安ずる所を趣となす。詞は古に准らへず、情の迫る所を詞となす。才は天に由らず、念の冥する所を才となす。一時の聲臭に括として以つて古今の波瀾を動かす。

- (14) 賀貽孫については嶋崎一郎氏に「周作人『賀貽孫論詩』翻譯」(『詩經研究』第十七號 一九九二年十二月刊)がある。

- (15) 戴君恩については村山吉廣「崔述『讀風偶識』の一斷面——戴君恩の『讀風臆評』とのかかわりについて——」(『中國哲學』へ北海道中國哲學會 第二十一號 一九九二年十月刊)参照。

- (16) 方玉潤については村山吉廣「方玉潤の詩經學」(『日本中國學會報』41集 一九八九年十月刊)がある。